

第7章

木曽の自然・景勝地 木曽八景と溪谷美



第1章
日本遺産とは
日本遺産木曽路

第2章
江戸時代以前の
木曽の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曽路11宿

第5章
明治以降の木曽檜活用、
森林鉄道

第6章
木曽の暮らし、風土、
宗教（御嶽山信仰）

第7章
その他
（観光宣伝など）

木曽八景

木曽八景は、近江八景になぞらえて尾張中納言宗勝のころ（1743年前後）、尾張藩の書物奉行をしていた松平君山が木曽路を訪れ作ったともいわれ、一説には尾張の俳諧師、横井也有ともいわれています。木曽の北部より次の八景があります。それぞれ、風景画とともに歌が詠まれています。

徳音寺晩鐘 徳音寺の晩鐘（とくおんじのばんしょう）

木曽義仲の菩提寺「徳音寺」。夕暮につく暮れ六つの鐘の音が晩秋の山々に響く風情は郷愁と旅情をかきたてます。

「遠近ハ聞も さためぬ山風の
さそふまなる 入相のかね」

徳音寺（木曽町）

住所：長野県木曽郡木曽町日義2326番地6

徳音寺は1168年（仁安3）、義仲が母小枝御前を葬った寺です。境内には義仲・巴御前らの墓があります。四季を通じて趣ある様子が楽しめますが、春には桜の美しい場所としても有名です。付近には義仲の資料を展示している義仲館（徒歩すぐ）などもあります。

木曽七福神では中山道各宿場町ごとに福の神をお祀りする「木曽七福神霊場」が開設されています。徳音寺では毘沙門天の御朱印を拝受できます。

御嶽暮雪 御嶽の暮雪（おんたけのぼせつ）

三岳・玉滝・開田にまたがる古くからの信仰の山、御嶽の五・六月頃の残雪が薄紫色の山肌に美しい模様を描き情緒があります。

「志なのちや むかはぬ不二のおもかげを
ここぞみたけの ゆきの夕はえ」

御嶽山（山麓周辺の地域）

標高3,067mの剣ヶ峰を主峰に、五峰五池を擁して雄大な裾野を広げる御嶽山。

古くから富士山、立山、白山などと並ぶ霊峰として知られ、多くの登拝者・登山者を迎えてきました。心のよりどころとして、また自然の恵み豊かな御嶽山は、敬いと親しみを込めて“おやま”とも呼ばれる木曽を代表する山です。

掛橋朝霞 棧の朝霞（かけはしのあさがすみ）

上松より4キロメートルの地点にある棧は、初夏のころの木々の緑、木曽川の藍、花崗岩のさまざまな形が朝もやの中にかすんで見える風景が一番よいといわれています。

「朝日影 にほえるみねは 猶晴れて
たによりかけむ きそのかけはし」

木曽の棧（上松町）

住所：長野県木曽郡上松町

かつては、危ういものの代名詞として古くから歌枕にも詠まれ、中山道一の難所と言われた場所。木曽川の絶壁に数百メートルにわたって架けられた藤づるで編んだ棧橋でしたが、現在は旧国道の下の石積みにわずかに街道の面影をとどめるに至っています。

寝覚夜雨 寝覚の夜雨(ねざめのやう)

堂々と流れる梅雨の木曾川にあって、寝覚の床が雨霧にしぐれる光景は神秘にして詩情あふれる美しさがあります。

「七とせの あとおや おもうたれか又
ねさめの床の 雨のよすがら」

寝覚の床(上松町)

住所:長野県木曾郡上松町

上松町周辺は、花崗岩地帯。その地形を木曾川の流れが削り、姿を現したのが寝覚の床です。花崗岩特有の割れ方が、大きな箱を並べたような不思議な造形をもたらしました。また明治以降は水力発電や用水の引水で木曾川の水面が低下し、岩の巨大さがより引き立っています。1923年(大正12)に国の名勝に指定され、現在は国定公園に指定されています。

風越晴嵐 風越の晴嵐(かざこしのせいらん)

上松町を眼下に見おろす風越山は、頂上周辺は見渡す限りのススキの原。緑の草山を夏風の吹き越していく様は雄大なながめです。

「吹くもまた あらしはよはき たえだえに
くもはれ残る 風越しの春」

風越山(上松町)

住所:長野県木曾郡上松町

風越山は典型的な里山で、江戸時代には、当時の山麓の様子が木曾八景に数えられました。草原を夏の風が吹き渡り、爽やかにそよぐ美しさを伝えたといわれます。しかし近代化とともに酪農家も減り、里山の需要がなくなってくると、木曾八景の美しさも失われていきます。かつて夏の風にそよいだ草原は雑木に覆われ、カヤの平の名残は山頂付近にわずかに残るのみとなりました。

駒ヶ岳夕照 駒ヶ岳の夕照(こまがたけのせきしょう)

木曾の各町村からながめられます。秋から春まで、白雪の駒ヶ岳連邦が、夕日に映えて赤紫色に照り輝くさまは幻想的な美しさです。

「おしめ人 入目を山の 名にしおふ
ひきゆく駒の すくる光を」

木曾駒ヶ岳(木曾路の各地)

「日本百名山」に数えられる中央アルプスの主峰。標高2,956mの山頂からは南アルプスや御嶽山、富士山も一望でき、高山植物や雲上の絶景は目を見張る美しさを呈します。

木曾谷の東に見せる険しい山容も印象的です。

小野瀑布 小野の瀑布(おののばくふ)

上松駅より約3キロメートル。中山道の名所であり、広重・英泉の合作による浮世絵「木曾海道六十九次」にも描かれています。落差は約20 m。昔よりこの街道で知られた名所ですが、今は昔の面影はあまり残っていません。

「名にたてる 木曾^{あさきぬ}の麻衣 そめなして
雲井にさらせ たきのしら糸」

小野の滝(上松町)

住所:長野県木曾郡上松町小野

国道19号線のすぐ脇に流れ落ちる滝です。1910年(明治43)には滝の上に鉄道が架けられました(中央本線)。この橋脚も表にはコンクリートなどを最小限にとどめ、石積みを用いて風情を醸し出しています。国道沿いには小さいながら駐車場があり、滝のすぐ側へ近づくことができます。葛飾北斎も「諸国瀧廻り」で描いています。

与川秋月 与川の秋月(よがわのしゅうげつ)

戦国時代の僧庵「古典庵」の故地から眺める月が、周囲の地形と相まって大きく美しいことから木曾随一といわれ、中秋の名月には秋月観月会が行われます。

「秋ふかき 高根のしげみ わけ過て
よかわにすめる 月そさやけき」

与川地区(南木曾町)

古典庵住所:長野県木曾郡南木曾町読書

与川の秋月観月会は、毎年中秋の名月の日に行われるイベントで、木曾八景としても有名な与川の秋月を大勢で楽しむ場です。与川では周囲の地形と相まって大きく見事な月を眺めることができます。当日は電車の到着に合わせて南木曾駅から無料バスが運行されます。

ねぎめのとこ

寢覚の床

■基本データ

- 住所** 木曾郡上松町上松1704
- アクセス** JR「上松駅」から徒歩22分(約1.7km)、バス(倉本行き)で5分(「寢覚の床」又は「中山道ねぎめ」下車徒歩5分)塩尻IC、中津川ICから60分、伊那ICから50分
町営駐車場(無料)、民間駐車場(無料または有料500円)
- 駐車場** 上松町観光協会／TEL 0264-52-1133
- 連絡先** 上松町教育委員会／TEL 0264-52-2111
- 指定** 国名勝(1923年)
中央アルプス国定公園区域に指定(2020年)



マップQR



木曾川の激流が、長期間にわたって花崗岩の岩盤を侵食してできあがった奇岩が有名な観光スポット。スケールの大きさ、奇抜さから木曾路を代表する景観であり、「木曾八景」のひとつです。

浦島太郎が目覚めた場所という伝説があることからその名前があり、同地には玉手箱を開けたあとまで描かれた浦島太郎の物語が残されています。

現在では木曾川の水が発電所に取り入れられるため水量が少なくなり、やや箱庭的な印象に変化してきました。

●地質上の特徴

花崗岩の方状節理(規則的な割れ目)と表面にできる甌穴(円形の穴)の形状が特徴的であり、地質学上、日本を代表するものといわれています。甌穴とは、河底や河岸の岩石の表面にある亀裂などに小石が引っかかり、川の流れによって何度も回転して穴を掘ったものです。

●石の名称

寢覚の床ではそれぞれの石に、形をなぞらえた名称がつけられている。

- ・床岩……浦島堂のかたわらの平らな石
- ・獅子岩……床岩の奥にある石
- ・大釜・小釜……獅子岩の向こう側の、甌穴のある岩
- ・屏風(びょうぶ)岩……流れに沿って壁のような岩(その他、烏帽子岩、象岩、腰掛岩などがある)

●明治天皇の巡幸

1880年(明治13)6月27日、寢覚の床で御小休みされた。

関連する観光コンテンツ

●臨川寺

松尾芭蕉、正岡子規、種田山頭火の句碑、姿見の池などがあり、寢覚の床への降り口があります。宝物館には浦島太郎が置き忘れたという釣竿や硯を展示されています。

住所:木曾郡上松町上松1704
拝観料:200円(宝物館は入館無料)
営業時間:8:00~17:00 無休

●寢覚の床美術公園

寢覚の床に隣接。野外彫刻(空充秋氏)、日時計のモニュメントなどがあります。

●小野の滝

中山道の名所であり、木曾八景の一つ。「木曾海道六十九次」にも描かれています。1910年(明治43)には滝の上に鉄道が架けられました(中央本線)。落差は約20m。国道沿いに小さな駐車場あります。

第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路

第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾樽活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)

●後日談のついた浦島太郎の伝説

昔、丹後の国、竹野郡浦島というところに太郎という少年がいた。ある日小舟で沖へ釣りに出た太郎は大きな白亀を釣り上げたが、お供のものが亀を殴り殺そうとしたので、太郎はそれを止めて海へ返してやった。

太郎が家に帰ろうとすると美しい少女が現れ、「私は先ほどの亀です。命を助けていただいてありがとう」と言い、太郎を龍宮城へ案内した。そこで龍王や乙姫にもてなされ、月日のたつのも忘れて遊んだ太郎だったが、ある日鶏の声を聞いて故郷を思い出した。

いとまごいを申し出ると、龍王から「故郷が嫌になったら再び戻ってくるように」と、弁財天像、万宝神書、そして「いかなることがあっても開けてはいけない」という玉手箱を贈られた。

太郎が故郷に帰ると見知らぬ人ばかりで、龍宮城で過ごすうち地上では300年の年月が経っていたことを知る。太郎は驚き、万宝神書を開いてみると、飛行の術や長寿の薬方などが書かれていた。それを読んだ太郎は足の向くまま諸国の旅に出た。

木曾の寢覚の床までやってきた太郎は、その美しい風景が気に入り、寢覚の里に住んで好きな釣りを楽しんでいた。あるとき、里の者に昔の思い出話をして、話のついでに玉手箱を開いてみせた。すると中から紫の煙が立ち昇り、太郎はたちまち300歳の顔になってしまった。人々も驚いて、近くの池の水に姿を写して見た。

それ以降、この池は姿見の池と呼ばれるようになった。太郎翁はその後、人々に霊薬を授けていたが、天慶年間にどこかへ立ち去ってしまった。里の人が太郎翁の立ち去った跡へ行ってみると、弁財天の像一体が床岩の上に残されていた。これを祠(ほこら)に祀って寺を建立したのが、臨川寺だという。

*十返舎一九『続膝栗毛 木曾街道』に次の記述がある。

「此ところに臨川寺といふ景地あり。寢覚の床といふこれなり。
むかし浦島太郎釣をたれし所なりと云伝う」

●浮石

木曾川沿いに作られた棧(かけはし)を、土地の人は波計(はばかり)棧と呼んでいたが、この棧と寢覚の床の間を行ったり来たりしている石があった。「浮石」といわれたこの石は上松の方に流れていったかと思うと、いつのまにか棧に戻っている。石が流れると必ずどこかで災害が起こったので、村人たちは心配していた。

ある日のこと、浮き石を見下ろす「弥生の茶屋」でこの話を聞いた旅の僧は「私の法力で、あの浮き石を止めてしんぜよう」と、主人から紙をもらい、歌を書いて長い間お経を唱えた。

波計や弥生の糸につながれて浮いたる石の流れこそせぬすると、浮石はびたりと止まり、それきり動かなくなった。村に不幸は起きなくなり、浮石の不安もいつしか消えてなくなったという。

●寢覚の床の主

寢覚の淵に住む主が、毎年、村の少女ひとりを人身御供に捧げさせ、生贄のない年は農作物がとれなかった。ある年、老夫婦の大事な娘に白羽の矢が立った。老夫婦は近くに住む行者に相談し、イノシシの腹子を丸揚げにして藤づるでしばり、それをエサに大勢で主を釣り上げ退治した。主は六尺もあるオオサンショウウオだったという。

●橋がない理由

昔、村人たちが相談し、対岸に橋をかけたことがあった。橋が出来上がり、村人たちが渡ろうとしたとき、不思議なことに、それまで渦を巻いて流れていた木曾川の水が急に鏡のようになって、おそろしい牛の顔が浮かび上がってくるのが見えたため、誰も渡ることができなかった。それ以来、寢覚に橋をかけようとするものはないという。

寝覚の床、文人達の描写

●島崎藤村の描写

「昼食の時に寝覚に送ろうとして道を急ぐことは、木曾路を踏んで見るものひとしく経験するところである。そこに名物の蕎麦がある。春とは言ひながら石を載せた板屋根に残った雪、街道の側に繋いである駄馬、壁を泄れる煙……寝覚の蕎麦屋あたりもまだ冬籠りの状態から完全に抜けきらないやうに見えていた。」

(『夜明け前』で蕎麦屋の風景を描く一説)

「寝覚は浦島のお話をかりて、岩のほとりのながめ深く静かなところに、浦島の釣を垂れたといふ床もある。臨川寺の弁天堂には浦島の釣竿といふのがある。そのほとりに姿見の池もあって、奇を好む旅人の必ず立ち寄る名所となつてゐる。(中略)

この竜宮の入口にも秋は暮れて、垣根に残って黄菊の花もあはれであった。」

(『一葉舟』木曾谿日記での寝覚の描写)

●正岡子規の描写

「上松を過ぐれば程もなく寝覚の床なり。寺に至りて案内を乞へば小僧絶壁のきりきはに立ち遙かの下を指してここは浦島太郎が竜宮より帰りて後に釣を垂れし跡なり。(中略)誠やここは天然の庭園にて松青く水清くいつこの工匠が削り成せる岩石は 峨々として高く低く或は凹みて渦をなし或は廻りて滝をなす。いか様仙人の住処とも覚えてたふとし。」

(『かけはしの記』での寝覚の描写)

島崎藤村・正岡子規・については

.....4章-68-69P参照

●「信濃の国」

長野県民に親しまれてきた「信濃の国」にも次のようにうたわれている。

「尋ねまほしき園原や 旅のやどりの寝覚の床
木曾のかけ橋かけし世の 心して行け久米路橋」

第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路

第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)

きそのかけはし

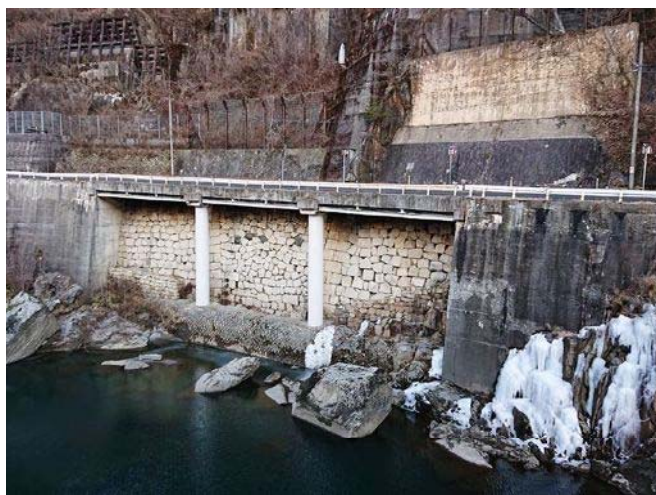
木曾の棧

■基本データ

- 住所 木曾郡上松町上松
- アクセス JR「上松駅」からバスで5分
塩尻IC、中津川ICから60分、伊那ICから50分
- 連絡先 松町観光協会／TEL 0264-52-1133
上松町教育委員会／TEL 0264-52-2111
- 指定 県史跡(1966年)



マップQR



木曾の棧の歴史

棧は険しい崖に沿って棧道を架け、人ひとりがやっと通れる道でした。松尾芭蕉が『更科紀行』で詠んだ「かけはしやいのちをからむつたかずら(棧や命をからむ蔦葛)」の句は、碓氷峠、太田の渡しと並び中山道の難所であった棧の状況をよく表しています。1647年(正保4)に通行人の松明の火で焼失しましたが、1648年(慶安元)、木曾を支配していた尾張藩は、木曾川の河原に長さ102m、道幅6.7m、高さ13mの巨大な石垣を築き街道を完成。建設費は当時の金で873両と言われ、19世紀(1800年代)前半で町方奉公人の年給は男2両、女1両の記録があり、江戸初期の一両の価値はそれより高いと考えると、数億円規模の工事だったと推察できます。

1966年(昭和41)、国道の改修で2本の橋脚の間14.5mだけを残し、約90m近い石垣は擁壁で埋め立てられました。石垣の一部が残ったのは、木曾路の写真集を刊行した沢田正春氏の働きかけによるものです。

また、岩に刻まれた磨崖碑^{まがいひ}が残されており、対岸には松尾芭蕉、正岡子規、種田山頭火が詠んだ句碑があります。

棧は、県歌『信濃の国』において、「旅のやどりの寝覚の床 木曾の棧かけし世も」と歌われているように長野県の名所であると共に全国的な遺構です。



信州デジタルコモンズ/
2代目安藤広重 諸国名所百景「信州木曾の雪」

あてらけいこく

阿寺溪谷

■基本データ

住所 木曽郡大桑村野尻阿寺国有林内

アクセス JR「野尻駅」から

タクシーで5分。徒歩約20分

連絡先 伊那ICから60km、80分

大桑村観光協会／TEL 0264-55-4566



マップQR

大桑村野尻の阿寺橋を渡った先にある阿寺溪谷。砂小屋山に源を発する阿寺川が流れる溪谷で、全長約15kmある清流の両岸には木曽五木が生い茂ります。

四季折々に表情を変える溪谷美のなかでも、流れる水の美しさは格別。エメラルドグリーンの清流はここならではの。上流部では、顔を洗うと色白美人になれるという言い伝えのある「美顔水」が湧き出ています。

犬帰りの淵や熊ヶ淵、六段の滝など見どころが随所にあり、飽きさせません。ウォーキングコースとしても整備されており、一番奥にキャンプ場があります。時間にあまり余裕がない場合は、吊り橋と六段の滝が楽しめる約1時間の遊歩道コースがあります。

JR野尻駅から溪谷入口まで徒歩約20分です。

山の神祭り

木の伐採に携わるひとを「杣(そま)」といい、切り出した丸太を沢から流す小谷狩、木戸側に流す大川狩、筏流しをおこなう人を「日雇(ひよう)」といいました。

人里離れた山奥で出稼ぎ生活を続ける彼らにとって唯一の慰安は月に一度の山の神祭りであったといい、この日は揃いの法被で木曽節を唄い踊ったという。

千畳岩(せんじょういわ)

大きな岩盤のため、こう呼ばれる。この下で耳を澄ますと、川の瀬音が反響して、まるで頭上に溪流が流れているかのような錯覚を受けるといい、「瀬音岩」ともいわれています。

■主要参考文献／『木曽～歴史と民俗を訪ねて』(木曽教育会郷土館部編著 信教出版部 2010)
『おおくわナビ 大桑村観光協会公式HP』



林鉄記念碑

阿寺溪谷の入口にあります。1923年(大正12)にアメリカ製のミニSLによる森林鉄道が開通し、切り出された材木の運搬は筏流しから鉄道に変わりました。



その森林鉄道も自動車の整備が進みトラック輸送されるようになり、1966年(昭和41)に廃止されます。

鉄橋跡では、水の流れに小石が回転してできた「甌穴(おうけつ)」が見られます。

雨現(うげん)の滝

右岸の岩上にあり、雨が降ると現れます。

狐ヶ淵・狸ヶ淵(きつねがふち・たぬきがふち)

狐や狸が自分たちの化け具合を確認するためにこの淵を鏡代わりに映し見ていたという伝説から、名づけられました。

ヒノキ美林

1894年(明治27)に植林されたヒノキ林です。

犬帰りの淵



猟師が犬を連れてこの谷に入っても、この淵までくると犬は恐れて渡ることができず、仕方なく引き返すことになるためこの名が付いたといわれます。

樽ヶ沢(たるがさわ)の滝

沢水が岩を落ちながら、らせん状に流れ落ちる落差約6mの滝。橋の真下にあるため、見落としてしまう人が多い。

六段の滝



対岸の林の中にある六段の滝。

第1章
日本遺産とは
日本遺産木曽路

第2章
江戸時代以前の
木曽の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曽路11宿

第5章
明治以降の木曽檜活用、
森林鉄道

第6章
木曽の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)

島木赤彦の碑

諏訪出身のアララギ派歌人、島木と伊藤佐千夫が木曽路を訪ね、阿寺温泉に泊まった後に詠んだ歌が刻まれています。「京の山長良夏川すずしけど木曽の林に思入りたり」ほか。

吊り橋

赤彦の碑からウナリ島までの遊歩道にある吊り橋は、全長25m、川床からの高さ8.21m。主ケーブルから吊り材で桁を吊るす形式で、地元産のヒノキなどが使われています。ワイヤー支柱は大桑村の電柱のワイヤーを再利用して地元住民が建てました。

牛ヶ淵

牛の形に似ていることから、名づけられました。この渓谷で唯一の蒼く深い淵です。

熊ヶ淵

このあたりには熊が多く、親子連れでこの淵で水遊びをする姿が時々見かけられたことから、呼ばれるようになりました。水底まで透けて見えるほど透明度が高く、美しい。

吊り橋のある遊歩道

渓谷にかかる2つの吊り橋をつなぐ形で遊歩道が整備されています。

下の吊り橋から遊歩道を回り、上の吊り橋に出て車道側を下ってくると、約45分で周遊できる(六段の滝も見る場合はプラス15分)。道の分岐で階段を下っていくと、六段の滝を目の前で見ることができます。遊歩道内は未舗装の山道で、所々アップダウンがあるため、注意が必要です。

阿寺溪谷の民話と伝承●ウナリ島

阿寺川の中にある長さ30m、幅10m程の島。昔、駆け落ちした男女が人目を忍んでこの地で暮らしていたが、ある日女が毒キノコを食べてもがき苦しんだ。男は夜の山道を里まで走り降りて薬を手に入れて戻ったが、女はすでにこと切れており、男は声をあげ嘆き悲しんだ。今でも雨で増水した夜になると、苦しんだ女のうなり声と男の鳴き声が聞こえるという。

●吉報の滝

阿寺川にそそぐ落差約25mの滝。泊まり込みで働いていた昔の山人たちには、里の様子はなかなか伝わってこなかったが、この滝の音がよく聞こえる日は里から良い知らせが届いたという。せせらぎの音とともに単調な生活の慰めとなったところから、いつのまにかこう呼ばれるようになった。

●砂小屋の冷水

阿寺溪谷キャンプ場内、森林奥の岩間から湧き出てくる清水はこの溪谷内でも最もきれいで冷たい。昔、この山を管理するために遠く尾張藩から派遣された役人たちの妻が見違えるほど色白になって帰ってくるため、その訳を聞いたところ、この清水を朝夕使っていたという。

この清水が「美顔水」といういわれです。

2010年(平成22)に「信州の名水・秘水」に選定されました。

●阿寺国有林ハナノキ(カエデ科)

高さ30m、直径1mになる落葉高木。4月頃に紅色の花をつけます。希少野生動植物保護条例・指定希少野生動植物に指定。

過去の台風などの影響で枯死が懸念されたため、2005年度(平成17)に独立行政法人林木育種センター「林木遺伝子110番」に登録され、挿し木苗木の増殖が依頼されました。2009年(平成21)に里帰りしたハナノキの苗木が植樹され、大桑村と木曽森林管理署南木曽支署、ボランティアとが保存・保全活動に取り組んでいます。

●阿寺溪谷キャンプ場

阿寺国有林内にあり、渓谷の清流を臨む緑豊かなキャンプ場。信州の名水・秘水に選定された湧き水「美顔水」が流れ出ています。

連絡先:阿寺溪谷エコくらぶ/TEL 0264-55-2013 (8:00~17:00)

●フォレスパ木曽

中央アルプスを一望する木曽川畔にある温泉リゾート。宿泊施設「あてら荘」、グラウンドゴルフコース、バーベキューコテージ、テニス、ゲートボールなどの屋内スポーツジムなどがあります。

住所:木曽郡大桑村野尻939-58 連絡先:TEL 0264-55-4455

柿其溪谷

自然・景勝地

南木曾町

■基本データ

- 住 所 木曾郡南木曾町読書
 アクセス JR「南木曾駅」からタクシーで10分
 中津川ICから約45分
 連絡先 (一社)南木曾町観光協会
 /TEL 0264-57-3123



マップQR

木曾川の支流、柿其川のV字谷の秘境、柿其溪谷は数ある木曾路の溪谷の中でも特に美しいと言われ、吊橋より上流8kmにわたって深い谷を埋めた巨大な花崗岩が滝や瀬や淵を織りなす景勝地です。春にはツツジ・シャクナゲ、秋には紅葉が旅人の目を楽しませます。

十二兼駅から自然歩道を通って、牛ヶ滝(写真下)まで4.5km、さらに奥へは林道を歩いていきます。特に、恋路のつり橋から牛ヶ滝までの約300mの遊歩道がおすすめです。

花崗岩をくりぬいて柿其川本流が落下する牛ヶ滝のながめは壮観。林道を徒歩40分のところに、展望台からの眺めが爽快な霧ヶ滝があります。

柿其峡(木曾川)

清冽な柿其川が木曾川本流に流れ込む出合の一带、「南寝覚」ともいわれる「寝覚の床」のミニチュア版で、木曾川の広い河原を形成する花崗岩の柱状節理が浸食されて、美しい姿を見せています。別名、中河原峡とも呼ばれています。国道19号「柿其入口」交差点から入ってすぐの柿其橋からも、よく望めます。(十二兼駅から徒歩約10分/850m)

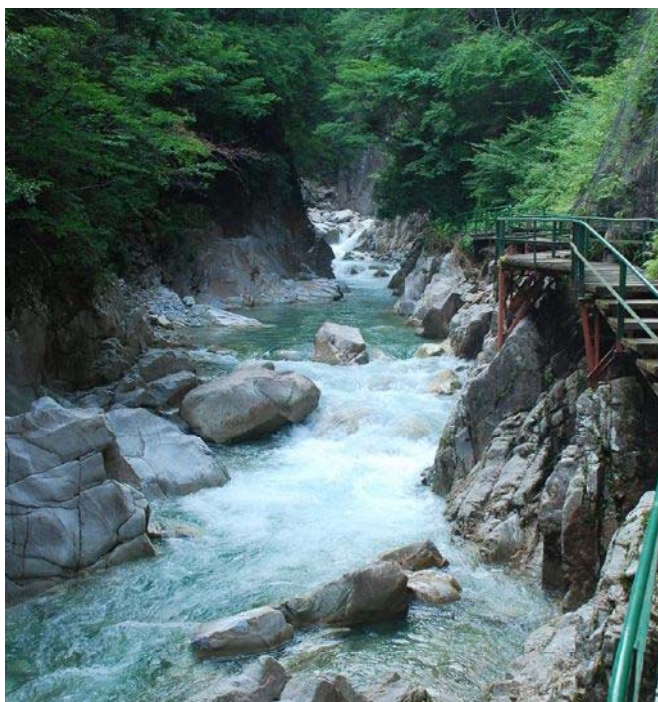
八剣神社

境内の大杉は木曾では珍しい熊野杉で樹齢570年余。1955年(昭和30)頃までは四本の杉が合体していたため「よすぎ」と呼ばれていました。現在は2本が残っています。(町天然記念物)

柿其水路橋(国の重要文化財)

桃介橋・読書発電所とともに国の重要文化財として指定されており、現存する戦前の水路橋の中では最大級のものです。

■引用資料HP／ぶらりなぎそ(一社)南木曾町観光協会



きこりの家

江戸末期の1864年(文久4)に建てられた民家を解体復元。自炊しながら昔の生活が体験できます。

柿其温泉(溪谷の宿いち川)

柿其溪谷入口にある温泉で、入浴・食事・休憩・宿泊ができる施設があります。泉質は単純弱放射能冷鉱泉。(要予約)

牛ヶ滝

巨大な花崗岩が壮観な景勝地。牛ヶ滝展望台への遊歩道はお勧めのコースです。



霧ヶ滝

牛ヶ滝からいったん戻り、林道を徒歩40分。展望台からの眺めは爽快です。



イボとり観音(十二兼・中山観音)

この観音堂にある木の靴でこするとイボがとれるといわれています。毎年8月14日には観音堂境内を出発して十二兼をまわって歩く百万遍念仏(町の無形民俗文化財)が行われています。



第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路

第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)

冊子制作協力団体・関連一覧

町村・団体

木曾町教育委員会 生涯学習課 文化芸術係

上松町教育委員会 社会教育係

南木曾町教育委員会 文化財町並係

木祖村教育委員会 教育振興係

王滝村教育委員会 総務係

大桑村教育委員会 生涯学習係

塩尻市教育委員会 文化財課 文化財係

中津川市 文化スポーツ部 文化振興課 文化財保護係

(公財) 妻籠を愛する会

奈良井区観光文化委員会

藤村記念館

協力者（順不同）

楯 英雄 氏

遠山 高志 氏

田上 次男 氏

中村 秀己 氏

高橋 滋 氏

企画・編集

木曾地域文化遺産活性化協議会

(事務局) 木曾広域連合地域振興課

〒399-6101 長野県木曾郡木曾町日義 4898-37

電話 0264-23-1050 FAX 0264-23-1052

Email chiikisinkou@kisoji.com

※この冊子は、長野県 地域発元気づくり支援金を活用して作成しました。 【2023年2月 発行】

※冊子内の画像・イメージ等は関係者の許諾を得て使用しています。二次利用は禁止します。



桃介橋



与川道



大妻籠から下り谷への中山道



田立の花馬祭り

